CAMK
熊本市現代美術館 アート・キッスレター ｜無料｜FREE

ART KISS LETTER

vol.67
2014初夏

草間彌生×上通アートフェスティバル
特別展示〈ヤヨイちゃんとトコトン〉

巻頭言

「今、あらためて草間彌生」

草間彌生は、この10年間で世界規模での劇的な展開を見せてきた。熊本での展覧会は今回で2度目となるが、草間アートの現代的意味を考えるすぐれた機会となった。

一昨年、ロンドンのテイト・モダンで開催された草間彌生展では、辛口のイギリス・ジャーナリズムからの反応は軒並み良好で、「この展覧会は『啓示』(revelation)であった」と評価された。「啓示」には「神のお告げ」あるいは「驚くべき発見」という意味がある。もちろん当地で草間が紹介されるのは初めてではない。その回顧展では、強力なインパクトをイギリス美術界に新たに与えたばかりか、通常は美術館に来ない層を掘り起こし、魅了したことが注目される。

草間の評価は、欧米からアジア、そして南米に広がり、その作品は最近では没入型デジタル技術やネットで育った世代の若者たちの心をもとらえているのだ。一方、美術市場では、2008年の秋ニューヨークのクリスティーズのオークションで、ドナルド・ジャッドが所有していた初期の網目模様の大作《No.2》(1959年)が579万ドル(約5億9千万円)の値を付け、これは女性の存命作家としては史上最高のものであった。そして草間は、ガゴシアンやツウィルナー等、国際的画商たちの間で最も魅力的なアーティストの一人となっている。

85歳にしてほとばしる創造力を示し、世界的評価を更新し続ける草間は、ピカソやルイス・ブールジョアを想起させる。そして私たちの胸を打つのは、幼少の時期から現在も続く自己の内的疾患との戦いであり、それを豊かな創造の泉に変容させる彼女の明晰で強靭な知性である。フランスの哲学者ジル・ドゥルーズは、「…作家そのものは病気でなく、むしろ医者である。自分自身と世界とを治療する医者なのである。」と語っているが、これは正にアーティスト草間彌生にふさわしい言葉といえる。

10年後、展開はさらに続き、私たちは3度目の草間彌生展を熊本で開催できるであろうか？

熊本市現代美術館館長　桜井武

草間彌生　永遠の永遠の永遠
2014年4月5日［土］ — 6月15日［日］

http://www.camk.or.jp

Contemporary Art Museum, Kumamoto

CAMK（キャンク）とは熊本市現代美術館の愛称です。

MUSEUM INFORMATION

2014 FEB - MAY

詩の朗読会

くまもと詩の朗読の会共催の自作の詩の朗読会です

詩の朗読会 テーマ「橋」

2014.2.27

第123回は「橋」を主題に15名の方が、詩作を発表しました。

橋と言うと、人や物が川や道などを乗り越えて向こう側へ渡る為に造られた建築物を思い出します。あちら側とこちら側を繋ぐ橋の役割に夢や希望を映し出す表現や、何気ない日常の風景として在る様子を素朴に詠ったものなど多彩な作品が発表されました。橋の上を渡る人、その下を流れる川や海をイメージしながら、昔の人々が豊かな生活の為に築いてきた深い愛情を感じとることができました。そして、人の手で丹精込めて造られた橋が、これからも私たちにとって希望の架け橋であってほしいと思いました。（N・H）【参加人数15人】

詩の朗読会 テーマ「午(馬)」

2014.3.27

第124回の詩の朗読会、テーマは「午(馬)」。13名の方が詩作を発表されました。

発表作に多かったのは、意外なところで競馬のイメージです。男性の著名な文学者たちが、競馬と人生を重ねた名言を残したこともあるからでしょうか？荒尾競馬のこと、競馬場で走る馬の姿を人生に譬える表現もありました。また、競馬の実況中継を詩作に盛り込んだユーモラスな作品もありました。組み合わせとして、「海と馬」がセットになったイメージも多く詩作に盛り込まれていました。穏やかな海と穏やかな馬、そこにしかない安らかさと美しい時間の記憶が目に浮かぶようでした。

馬の賢さが主題となった作品もありました。家にいた馬に確認したい過去の謎めいた記憶や、老馬の従順な賢さを哀しむ作品など、自分の気持ちを馬に近しく重ねる表現もありました。

生活の上ではだいぶ遠い存在になった馬ですが、気持ちとしてはまだまだ側に近しい馬について、様々考えさせられる詩作の数々でした。（H・T）【参加人数13人】

詩の朗読会 テーマ「永遠」

2014.4.24

125回目の詩の朗読会のテーマは「永遠」。12名の方が詩作を発表してくださいました。「永遠」から宇宙をイメージした作品や、「永遠」を「身近な所から探した」と話す女性は、子どもとの愛情や絆を表現されていました。今回は、開催中の草間彌生展に合わせたテーマということで、展覧会をオマージュとした作品も読まれました。（Y・M）【参加人数12人】

CAMKEESの活動

美術館ボランティアCAMKEES(キャンキーズ)による活動紹介

CAMK「読みがたり」第55回 テーマ「もうすぐ春」

2013.3.15

春の陽気に誘われて、今回もたくさんの子どもたちが集まってくれました。今回のテーマは「もうすぐ春」。絵本は『いちごです』、『ふうとはなとたんぽぽ』『ちょうちょはやくこないかな』など、春らしいお話をたくさん紹介しました。紙しばい『よもぎだんご ぺったん』では、ウサギとクマがつくったよもぎだんごを、子どもたちがパクパクつまみ食い。ラストの手あそび「さよならあんころもち」が始まると、（直前の紙しばいに出てきた）「よもぎだんごをたべたい！」という子供たちのリクエストにより、急遽よもぎだんごを作ることに！「さ～よ～な～ら～、よ～もぎだんご♪」とみんなで楽しい読みがたりとなりました。（K・O）【参加人数24人】

CAMK「読みがたり」第56回 テーマ「ずっといっしょ」

2014.4.19

絵本『おはよう』や『あおくんときいろちゃん』、手遊び「たんぽぽ」など、家族が登場するお話や、春らしいお話を紹介しました。

パネルシアター『キャベツとあおむし』は、「キャベツのなかから♪」と手遊び歌に合わせて、キャベツからあおむしの家族が出てきて、最後は蝶々になって飛んでいくというもの。親指、人差し指と順に動かし、蝶々になって飛んでいく場面になると、「ばいばーい」とみんなで手を振って楽しみました。あおむしの動きが本物のようにクネクネとしてかわいらしく、参加した子どもたちも笑顔で楽しんでいました。（N・H）【参加人数20人】

CAMK ピアノコンサートvol.15

2014.4.20

CAMK春のピアノコンサートvol.15が開催されました。『春よこい』や『さくらさくら』など春にぴったりの曲や、コンサートならではの連弾があり、日曜日の昼下がりのひとときを楽しんでいただけたようです。

「久しぶりに来たのですが、とてもよかった。」（女性）「出演者が少なく、もう少し聴きたかった。久しぶりにまとまって聴けてよかった。また開催してほしい」（60代 女性）（アンケートより）（E・Z）【参加人数50人】

月曜ロードショー上映報告

毎週月曜日14時・18時より　無料

上映リスト(2／16 ～ 4／30)

2月17日「ハッピーサンキューモアブリーズ」2010年　アメリカ映画　99分
2月24日「天使の詩」1966年　イタリア映画　104分
3月3日「花はどこへいった」2007年　日本映画　71分　＊日本語字幕付き
3月10日「恋の終わりの始め方」2007年　アメリカ映画　97分
3月17日「第七天国」1927年　アメリカ映画　117分
3月24日「ポイスメール」2009年　カナダ映画　92分
3月31日「人生、ここにあり！」2008年　イタリア映画　111分
4月7日「恋愛手帖」1940年　アメリカ映画　108分
4月14日「夜の訪問者」1970年　フランス映画　94分
4月21日「レンブラント 描かれた人生」1936年　イギリス映画　81分
4月28日「刑事」1995年　NHK放送作品　日本　89分　＊日本語字幕付き

ミュージック・ウェーブ

展覧会や季節にあわせたコンサートを開催しています

ミュージックウェーブNo.078

第5回 オハイエくまもと とっておきの音楽祭

2014.3.23

「音楽で心のバリアフリー」を目指す、「第5回オハイエくまもと とっておきの音楽祭」が開催されました。今年も当館が協力し、ホームギャラリーが公演会場のひとつとなり、様々な演奏が行われました。ハンドベルや、ピアノ、コーラスなどそれぞれのグループが、それぞれの魅力を披露しながら楽しそうに演奏する様子につられて、会場の観客の皆さんも手拍子を合わせるなど、音楽の楽しさを一体となって感じる場となりました。（H・T）

【参加人数合計200人】

ミュージックウェーブNo.079

邦楽コンサートinCAMK

2014.4.12

今年もホームギャラリーで邦楽コンサートを開催しました。「第20回くまもと全国邦楽コンクール」に先立ち行われた、このプレイベントの出演者は、熊本箏演奏者協会の皆さん。今年は、古典箏曲で有名な「六段の調べ」から現代邦楽を含む5曲が披露され、心地よい和の音色が会場を包みました。また、アンコールには、松任谷由実作曲の「春よ、来い」が演奏され、邦楽を気軽に楽しめるコンサートとなりました。（Y・M）

【参加人数50人】

サンバワークショップ＆大道芸パレード

2014.3.15

STREET ART-PLEX KUMAMOTO 大道芸2014のイベントの一つとして、当館ではサンバワークショップが行われました。講師は熊本在住のサンバダンサーのマサシさん。約10名の親子が参加し、マサシさんのかけ声や音楽に合わせて、みんなでサンバのさまざまなステップを練習しました。子どもたちはノリノリで身体を動かしていましたが、意外にハードな運動量に息が上がってしまう大人も…。ステップ練習の後は、パレードで使う楽器「ガンザ」を制作し、それをブラジルカラーに装飾しました。ガンザをシャカシャカ鳴らしながら踊れば、子どもたちのテンションはさらにUP！

練習を終えたら、いよいよ実際のパレードに出る準備。みんなでブラジルカラーのものを身につけて一体感を演出します。さらにフェイスペインティングを施し、いっそう盛り上がるお祭り気分！

大道芸人や楽隊が列をなして下通をパレードし、そこにワークショップチームも加わります。次々現れる大道芸人に子どもたちは大興奮！マサシさんもそれまでとはうって変わって華やかなサンバ衣装に着替えて、パレードの先頭をゆきます。子どもたちもガンザを振りながらバテリア（打楽隊）チームに続きます。パレード隊は銀座通りから出発し、上通入口までにぎやかに行進しました。そしてパレードの終盤ではマサシさんが子どもたちを先頭に連れてきてくれました。たくさんの濃い濃い体験をして、きっと子どもたちの心に残る一日になったのではないでしょうか！（G・S）

【参加人数10人】

ヒルノダイドウゲイ

2014.3.16

STREET ART-PLEX KUMAMOTO 大道芸2014のイベントの一部として、キッズサロンで紙芝居屋ぐれっちさんとチムチムサービスさんによるショーが行われました。

ぐれっちさんは紙芝居によるシルエットくいずや、おばけのくせに怖がりな「どんぐりおばけ」のお話を披露してくれました。テンポのいい語り口に、今の子どもも昔の子どもも楽しそうに聴き入っていました。ショーの終わりには、くいずに見事正解した方々にぐれっちさんからのプレゼントもあり、皆さん大喜びでした。

続いて姉弟のクラウン、チムチムサービスさんの登場。見慣れない独特のメイクに最初は驚いた子も多かったようですが、マジックありアクロバットありのコミカルなパフォーマンスに、どんどん引き込まれていました。笑いの絶えないドタバタショーでしたが、最後の大技が決まったときには「おお～!!」と歓声が上がり、拍手喝采でのフィナーレとなりました。（G・S）

【参加人数20人】

「アール・ブリュット・ジャポネ」展

「つみき絵」を作ろうワークショップ

2014.2.16

コーダ・ヨーコさんを講師にお迎えした今回のワークショップは、大人を対象としたもので、16名の方にご参加をいただきました。つみき絵は、カラフルに塗られた三種類の木片上に小さく切った新聞やボタン、毛糸などを貼り合わせたものを固定して制作します。カラフルな木片やボタン、毛糸、フェルトなど様々な素材が入ったガラス瓶は宝石のように色とりどり。1ミリ単位の細かい作業なので、皆さん息を止め、ピンセットや爪楊枝を駆使しながら、童心に帰って楽しく作品を制作していただけたようでした。（K・O）

【参加人数16人】

「アール・ブリュット・ジャポネ」展

コンテンポラリーダンス公演

2014.2.23

「アール・ブリュット・ジャポネ」展最終日にホームギャラリーで、コンテンポラリーダンスの公演が行われました。NPO法人アートスイッチとの共催イベントで、「アール・ブリュット・ジャポネ」展からインスパイアされたことをダンスにするというもの。事前に行われた5日間のワークショップ参加者と石井則仁さん、小池陽子さんという世界的に活躍されるダンサーとの公演に皆さん釘づけでした。また、アフタートークでは、今回の振り付けやダンスの構成、熊本の印象について語っていただきました。（E・Z）

【参加人数35人】

第25回熊本市民美術展　熊本アートパレード

表彰式

2014.3.7

熊本アートパレードの開会式と表彰式を行いました（受賞作品については、前号のvol.66参照）。340点の中から表彰作品が選定され、審査員の原田マハさんより受賞者の皆様に賞状が手渡されました。また、毎年アートパレードの展示をお手伝いいただいている、コラボレーターの会からもコラボレーターの会賞が授与されました。開会式後の内覧会では、受賞者を含め多くの方々が熱心に聴き入る中、受賞作品について原田さんが一つ一つに丁寧にコメントをされる、アットホームな温かい式となりました。（A・A）

審査員 原田マハ氏講演会

2014.3.8

審査員を務めていただいた、作家・原田マハさんによる講演会を開催しました。原田さんは、今回の出品作品や審査をされた感想を述べられた後、キュレーターから小説家へと転身されたご自身のアートを巡る物語を話してくださいました。多くの美と人々との出会いは、まるで小説のように刺激的でした。そして、講演会は今年の出品テーマとなった「光」へと展開します。2013年に出版された『ジヴェルニーの食卓』は、原田さんが長年温めてきた大切な物語で、具体的でもあり、抽象的でもある「光」というものを、美を通して捉えようとしたものです。新しい美を求め、時代を切り拓いたマティスやモネといった画家たち、彼らを取り巻く女性たちの視点から捉えられたエピソードは、原田さんから偉大なアーティスト達に送られたラブレターのようにも感じます。執筆秘話とともに、古（いにしえ）より人々が求めてきた「光」、アーティストたちが表現しようとしてきた「光」を、ジョットからモネまで多彩なスライドを交えて、ユーモアと愛情たっぷりにお話していただき、「光」の普遍性について改めて認識させられる機会となりました。聴講者の皆さんも、原田さんの情感豊かなトークに引き込まれている様子が印象的でした。（A・A）

【参加人数80人】

オーディエンス賞

熊本アートパレード期間中の3月8日（土）から14日（金）まで、オーディエンス賞の投票をいただきました。132票の投票のなかから、見事オーディエンス賞に選ばれた作品は、平面洋画部門にご出品された、田尻豊さんの《まもなく外は活動をはじめるのに十分な明るさとなる》でした。家族とともに過ごす穏やかな日常を柔らかな光で描いた作品に、来場者も心を動かされたのではないでしょうか。おめでとうございました！

投票いただいた皆さま、ありがとうございました。（A・A）

「草間彌生 永遠の永遠の永遠」展

特別講演会「草間彌生の世界」

2014.4.6

「草間彌生 永遠の永遠の永遠」展の企画監修者のお一人でもある、建畠哲さん（京都市立芸術大学学長・埼玉県立近代美術館館長）をお迎えして、草間さんの作品世界についてお話いただきました。ニューヨークから帰国直後の草間さんとの出会いや、初期作品の読み直しなど、長年その作品制作を見つめてこられた立場からの愛情あふれるまなざしに、多くの方が興味深く聞き入っていました。（A・S）

【参加人数50人】

プレママ&ファミリーツアー

2014.4.12

「草間彌生 永遠の永遠の永遠」展のプレママ&ファミリーツアーを行いました。たくさんの申し込みがあったため、2グループに分かれてのスタート。美術館でのお約束を話した後に、会場に入っていきましたが、みんな約束をしっかり守って、学芸員の案内を聞くことができました。なかでも《チューリップに愛を込めて、永遠に祈る》と《魂の灯》はインパクトがあったようで、何度も嬉しそうに体験する姿が印象的でした。（A・S）

【参加者45人】

ナイトツアー

2014.4.17&19

近隣の商店街の方々を対象とした「草間彌生 永遠の永遠の永遠」展ナイトツアーを開催しました。閉館後に日ごろからお世話になっている商店街の方々をお招きして、学芸員が展覧会を案内するツアーも今回で6回目となりました。2日に分かれて開催し、両日とも50人を超える方々にご参加いただきました。皆さん興味津々で、じっくり絵画をご覧になる方や、LEDの光が無限に広がる空間の作品《魂の灯》に何度も足を運ぶ方など、思い思いに楽しみ、終了時間ぎりぎりまで熱心に鑑賞されていました。（N・H）

【参加人数合計110人】

グッズも楽しい草間彌生展！
草間下着が密かなブームに…？

草間彌生×上通 アートフェスティバル

2014.4.5-6.15

草間彌生展開催を記念して、上通商店街では「上通アートフェスティバル」が展開されています。展覧会を割引料金で観覧できるオリジナルの「水玉カード」が各店舗で配布されたほか、メガネの大宝堂、長崎書店のウインドウでは、草間さんの《水玉強迫》を会期中展示（メガネの大宝堂は～5月6日まで）。そして人気のカフェ・スイスが「水玉カフェ」に変身し、「水玉ミルクレープ」などの記念スイーツを提供いただいています。その他、3店舗をまわると、抽選で100名に草間展グッズが当たるスタンプラリーや、チケット半券で様々な特典が受けられるサービスなど、まさに〝水玉尽くし〟の上通となりました。（A・S）

入場者数1万人を達成！

2014.4.25

開催中の「草間彌生 永遠の永遠の永遠」展の入場者数が1万人を達成いたしました。

記念すべき1万人目の方は、熊本市内からお越しの60代の女性3人グループ。記念品として、展覧会カタログとグッズが贈呈され、館長による会場案内も行われました。お一人の方が草間彌生のファンで、お友達を誘い来館してくださったそうです。「草間さんが大好きで、作品からエネルギーを感じる。今回の展覧会では、新作ポートレートの3点に特に圧倒された。」と言っていただきました。（N・H）

GⅢ

ギャラリーⅢ（GⅢ）は、熊本、九州のアーティストを紹介し、応援していくスペースです

GⅢvol.97「秀島由己男 創造と探究の生者」展

「秀島由己男　創造と探究の生者」展

2014.2.27-6.8

水俣出身、玉名在住の美術家秀島由己男さんの個展を開催しました。この展覧会では、秀島さんの1970年代の初期代表作から最新作までを紹介していますが、それとあわせ、秀島さんが長年かけて収集した古今東西のアートコレクションを初公開するもので、GⅢと隣接する井手宣通記念室、両会場を使用しての企画展として行いました（出品点数102点）。コレクションについても、前期（～4月21日）・後期と作品展示替えを行えるほどの点数を出品いただき、アフリカ仮面やこけし、浮世絵や、カロやピラネージの版画が秀島さんに与えた影響を同時に会場内で確認できる、緊張感と密度の高い、迫力の空間がたちあがりました。

展覧会開催記念にカタログを発行し、展示作品や、作家インタビュー、担当学芸員の小論も掲載しております。（H・T）

アーティストトーク

2014.3.21

秀島由己男展関連イベントとして、秀島由己男さんご本人によるアーティストトークを開催しました。

本展では、秀島さんのご希望もありましたので、初期代表作として、3人の詩人・歌人との詩画集が展示されています。石牟礼道子さん、故・安永蕗子さん、高橋睦郎さんとの、詩画集を発刊することになったきっかけや、それぞれがどのようにコラボレーションが行われたかなどのいきさつをお聞きしました。特に、同郷の石牟礼さんとの《彼岸花》の共同制作については、若い時のお二人の活き活きとした現場のナマの様子が伝わってくるような魅力的なお話でした。

また、作品の技法や画題（室内画や人物画について）、最近集中して制作されている、「透明」を描くことについてなど、様々なお話をお聞きすることができました。

作品を前にしてのトークでしたので、トーク終了後にも会場に留まり、改めてじっくりと作品を鑑賞していた来場者の姿が印象的でした。（H・T）

【参加人数30人】

CAMKレクチャーカレッジ「秀島由己男の作品とアートコレクションについて」

2014.4.27

秀島由己男展関連イベントとして、CAMKレクチャーカレッジ『秀島由己男の作品とアートコレクションについて』講演会を開催しました。

導入として、本展の内容・構成が決まるそもそものきっかけとなった、2008年に自宅兼アトリエを訪問した際の、秀島さんのアートコレクションとの衝撃的な出会いと、2011年に個展の準備を始めた時に、その記憶が忘れられずに出品を願ったことを紹介するところから始めました。続いて多様なコレクションと秀島作品の比較を行い、そこに読み取れる共通点を紹介していきました。カロの作品にみられるエッチングの高い技術による空間表現と秀島作品との比較、ピラネージの作品にみられる想像と理想のローマ図と、秀島の幻想的な都市風景《われらにさきかけてきたりしもの》との比較、豊国（3代）浮世絵「五節組」と《変化十態》の共通点、アフリカ仮面と《風の舟》の共通点、こけしと《太郎（詩画集「彼岸花」）》の共通点、三春張子人形と《霊歌》（未完）に共通する身体表現の単純化などを紹介しました。

また、秀島の室内画にみられる多方向からの視点による空間構成については、最新作の《五つの玉子》（未完）と、広重の「江戸名所四季の眺　高輪　月の景」を比較しながら、浮世絵にみられる西洋とは異なる多方向からの視点による遠近法を、秀島作品も、画面構成において活用していることを詳しく説明しました。

アンケートにも、このような展示中の絵画作品の読み解きは美術への興味を深めるとの好意的な意見をいただきました。（H・T）

【参加人数20人】

第19回熊本シルバー文化作品展

2014.3.8-23

熊本アートパレードに合わせて、熊本シルバー文化作品展が開催されました。今回も多数の作品が出展され、その素材・技法も、絵画、写真、彫刻、陶芸、書、切り絵、木目込み、編み物、刺繍…と、バラエティーに富んでいました。中には、金地に五輪マークをあしらった「東京五輪」の掛け軸や、こいのぼりを縫い直して制作されたドレスなどの大胆な作品もあり、量・質ともにたいへん見ごたえのある展示となりました。（G・S）

くまモン誕生祭記念写真展

2014.3.12-23

3月12日はくまモンの誕生日ということで、美術館界隈でくまモン誕生祭が開催されました。それにあわせ当館では、くまモンワールドツアー写真展【スマイル】を開催。

くまモンがパリ、上海、ボストンなど世界各地を訪れた時の写真を、美術館のフリースペースに展示しました。また、写真展を観に来たくまモンを追って美術館を訪れたたくさんの方々のために、プチ撮影会も行われました。（E・Z）

水戸岡鋭治「超低床電車のデザイン」及び「水戸岡鋭治展」記者発表

2014.3.20

デザイナーの水戸岡鋭治さんによる「超低床電車のデザイン」及び「水戸岡鋭治展」の記者発表が、水戸岡さんご本人や熊本市長を招いて、ホームギャラリーで開催されました。

熊本市電開業90周年にあわせて誕生する超低床電車は、外装は上品な濃茶のメタリック、内装には木をできる限り使用することで「森と水の都くまもと」が表現されています。水戸岡さんは発表において、そういったデザインコンセプトや「COCORO」という本車両のネーミングの由来の他、まちづくりのあり方やそこでのデザインの役割にも言及されました。そこで語られた、「この車両は街の魅力や可能性を感じてもらうための〝額縁〟である」というお話には、市長も深くうなずいていました。

この新車両は10月から導入される予定ですが、それに先駆けて当館ではこの夏「水戸岡鋭治からのプレゼント―まちと人を幸福にするデザイン」展を開催します。今回の記者発表ではこの展覧会についてのプレゼンも行われ、展覧会の構成(予定)や、実際に人を乗せて会場内を走るミニトレインなど個々のアトラクションについて、当館館長が発表しました。これまでの展覧会とはひと味もふた味も違う、水戸岡ワールドが展開される予定ですので、こちらもどうぞご期待ください！（G・S）

【参加人数20人】

クリエイティブカフェくまもと2014

2014.4.24

2012年に熊本市と熊本市現代美術館（指定管理者：公益財団法人熊本市美術文化振興財団）が、協働で立ち上げた事業「クリエイティブカフェくまもと」の、今年度版の第1回目は、「国内のアートセンターの現状とそこから学ぶもの」をテーマとする報告会でした。昨年度、当館スタッフが全国で注目を集めるいくつかのアートセンターへ視察に足を運び、現場のコアスタッフに聞き取りを行うなかで、その魅力と工夫を知ったところで、当館の市民サービス向上に向けてどのように生かすことが出来るか、というレポートを行いました。新潟の「りゅーとぴあ」、長岡の「アオーレ」、岐阜の「アーラ」、青森の「はっち」にみられたのは、行政の長期的ビジョン、改革に積極的な取り組み、市民の能動的な多種多様の働きかけ、そして変化の興し方から「変化」をどのように可視化し使えるツールとして表すかという、関わる人たちの多方向からの工夫でした。会の終了後にも、いくつかの小グループが自然に発生し、今後の熊本をどのように良い方向に働きかけられるかをテーマにした意見交換も自発的に行われました。今後も、様々な意見交換とアクションが当館発で生み出されるような、交流の場づくりに取り組んでいきたいと考えています。（H・T）

【参加人数45人】

ホームギャラリーからのお便り

ホームギャラリーからおすすめの一冊をご紹介いたします。

VOL.20

「無限の網」

著者：草間彌生
出版社：作品社　発行年：2002

皆さん、「草間彌生 永遠の永遠の永遠」展はご覧になりましたか？この本は無限の水玉と網模様のモチーフで知られる草間彌生さんが前衛アートに捧げた人生を振り返る自伝です。

草間さんは幼少の頃より、「物体の周りにオーラが見えたり、動物や植物の話す言葉が聞こえたり」などの、幻覚や幻聴を経験します。そうした幻覚を形にするためにスケッチを重ねていき、その行為をもって驚きや恐怖を静めていったと言います。それが彼女の絵の原点であるそうです。

その後、28歳でアメリカへ渡り独創的な作品や、パフォーマンスの形態をとった「ハプニング」（詳しくは本書で）といった活動はアート界に衝撃を与え、前衛芸術家としての地位を築きます。

読み進めていくうちに、辛い幼少期の記憶、特異な親子関係や、彼女が背負ってきた病さえも、世界的な前衛芸術家、草間彌生をつくる上で、必要なものだったのではないかと感じさせられます。また彼女は芸術家でありながら、小説家、詩人としても名を馳せており、その生き様や創作に対するエネルギーに圧倒される思いがします。

アートに興味がある人も、ない人も関係なく、多くの人に読んでほしい1冊です。あなたも草間彌生ワールドを堪能してみませんか？（Y・Ma）

Visitor's letter

アンケートに寄せられた感想（抜粋）を紹介します

「第25回熊本市民美術展　熊本アートパレード」展

- 市民参加のすべての作品を展示するすばらしい作品展でした。投票による人気作品の選出も面白いと思います。（熊本県・70代・男性）

「草間彌生　永遠の永遠の永遠」展

- 草間さんの作品は、7歳、6歳の子ども達の心にも響くものがあったようで親子で楽しめました。（熊本県・30代・女性）
- 草間さんの内からあふれ出る創作意欲に圧倒されました。画面を埋め尽くす、目、植物、水玉、鮮やかな色彩、とても美しくて、こんなに自由に色を使える事に、喜びを感じました。（熊本県・50代・女性）
- 草間さんの世界観を肌で体感することができました。とても素敵でした。（鹿児島県・20代・女性）

［執筆者一覧］＊原稿の文末にイニシャル表記
兼城昌山（S・K）［書道家］
蔵座江美（E・Z）［熊本市現代美術館主任学芸員］
冨澤治子（H・T）［熊本市現代美術館主任学芸員］
坂本顕子（A・S）［熊本市現代美術館主任学芸員］
芦田彩葵（A・A）［熊本市現代美術館主任学芸員］
佐々木玄太郎（G・S）［熊本市現代美術館学芸員］
濱川倫子（N・H）［熊本市現代美術館学芸アシスタント］
丸吉ゆかり（Y・M）［熊本市現代美術館学芸アシスタント］
平原奈津美（N・H）［熊本市現代美術館学芸アシスタント］
大田黒翠代（K・O）［熊本市現代美術館学芸アシスタント］
松本芳典（Y・Ma）［熊本市現代美術館総務主事］

ART KISS LETTER アートキッスレター
vol.67初夏号（2014年6月）【無料】
発行人：桜井武
編　集：佐々木玄太郎　濱川倫子
デザイン：石井克昌（MOTOSHIKI）
印　刷：シモダ印刷
発　行：熊本市現代美術館
860・0845
熊本市中央区上通町2・3
電　話　096・278・7500
ファックス　096・359・7892
http://www.camk.or.jp/

【次号は盛夏号（8月発行予定）】

ART DE GYAN

アート・どぎゃん。

＊熊本弁でアートはどうなの？という意味です

「6人展ーはたちー」

2014.3.15-20

でんでん舎／dendensha
熊本市練兵町45 早野ビル1F
℡096・324・0353

2014年1月に成人式を迎えた20歳（ハタチ）の学生6名によるグループ展である。6名全員が崇城大学芸術学部美術学科に在籍しており、共同制作のインスタレーション「回想するカケラ」を中心に絵画や彫刻作品が並ぶ多彩な空間であった。ハタチと位置付けた〝今〟という時間から生まれる瑞々しい感性に触れることができた。中心に置かれた「回想するカケラ」は、来場者が参加することができ、作品の一部を共有する楽しさがあった。卵の殻を自分の手で割り空の小瓶に詰め、日付を書いたタグを付けて机に戻す。新たに〝生まれる〟というイメージを忘れずに閉じ込めるというコンセプトだ。瓶が透明なので他の人が割った殻の形を眺めるのも一種の面白さがあった。卵の殻を割る感覚もまた、胸のすっとする気持ちよさが残り、20歳のスタート地点に想いを馳せることができた。（N・Hi）

シロの風

2014.3.15-23

新町三畳美術館
熊本市中央区新町1・10・28
℡080・4288・8882（櫻井）

熊本新町のパーソナルメゾン、モヒカンポシェット（洋服）と宮部竜二さん（立体造形）、岡松トモキさん（映像）による展覧会。家々も木々も真っ白な空に浮かぶ城をテーマにして、移り変わる季節や天気を全て一点ものの100枚の白いシャツで表現するというモヒカンポシェットの挑戦は、一見無謀にも思えるが、溢れんばかりの創作意欲を形にするにはこうするしかなかったのだろう。3ヶ月で100枚のシャツを作ったというから驚きである。またその白いシャツが移り変わる季節と共に刻々と変わっていくさまをストップモーションアニメーションで表現した岡松トモキさんの作品からは、繊細さの中に荒削りなサウンドがアクセントとなっていた。宮部竜二さんによる立体造形が「シロの風」の世界観をより強固なものにしていて、次の展開が楽しみな展覧会だった。（E・Z）

第27回 国際文化交流会

2014.3.25-30

熊本県立美術館分館
熊本市中央区千葉城町2・18
℡096・351・8411

国際交流会の書道愛好者73人が各1点ずつ出品していた。中国の紀元前1100年頃の西周の大盂鼎の作品から、清時代までの書の古典の臨書や、日本の平安時代の高野切の「かな」に空海、量感、高村光太郎等までの臨書など、多彩で、百花繚乱の書作品展となっていた。

森山淡草会長は黄庭堅のダイナミックな用筆のうまい「草書」のタッチを、リズムよく書けていた。浦川草経さんの仙厓は、大胆で自由奔放な作となっていた。中島豊泉さんのアラビア文字もユニークで、デザイン文字の面白さを見せて、美しく表現されていた。中国の三千年余りの歴史の重さや美しさを見せる書の臨書展となっていた。（S・K）

森山淡草 傘寿記念書展

2014.4.29-5.5

熊本県立美術館分館
熊本市中央区千葉城町2・18
℡096・351・8411

元熊本大学教授の森山さんの書展である。学生時代から苦労して書の道を歩むことになって50年。この節目にと43点を並べた。自分の好きな言葉だという「愚直」をはじめ、「眼蔵」「無尽」「篤好」「道在邇」等、少字数の帛書や篆書作品に行草書体と、古代文字等を造形的にもうまくまとめ自由闊達な書作品になっていた。白磁皿の陶書等の実用書も見られた。弟子になる斉藤無涯さん、徳田翠雨さん、成田水邨さん、緒方龍生さん、浅野千穂子さん、早崎和子さんの6名も賛助出品していた。（S・K）

第17回 崇城美研作品展

2014.5.6-5.11

崇城大学ギャラリー
熊本市中央区花畑町10・25
℡096・323・1158

崇城大学が管理、運営をしている絵画教室「崇城美研」の作品展。崇城美研は創立10年を超えるそうで、月に3回活動している。講師は元熊本県立第二高校美術科教師で画家の上野豊さん。所属生は現在は60代～80代の方々で、今回は32名の方の展示であった。東光会会員、会友の方も多いとのこと。主に油彩で、風景画や静物画が多く見られたが、それぞれの個性と実力を兼ね備えた、見ていて気持ちのいい作品ばかりだった。（N・H）

編集後記

昨年度をもちまして、2001年に当館開館プレイベントの一環として誕生して以来、ずっと担当させていただいておりました「AKL」の編集を卒業することとなりました。デザイン・掲載内容ともに紙面のリニューアルを何度も行い、時代に合ったスタイルを追求してきましたが、新編集長の手で、今後「AKL」がどのように変化していくのかが楽しみです。

編集後記を書けなくなるのは少し名残惜しいです。毎回とても自由に楽しく書いておりました。

2代目編集長　冨澤治子

今年度よりAKL新編集長に任命されました、佐々木玄太郎です。AKLをより多くの方に楽しんでいただけるよう、知恵をしぼっていきたいと思います。それにしてもまずは編集業をしっかりできるようになることからですね…。今回は早速バタバタしてしまいました。未熟な自分を支えてくれる周囲の方々と、この冊子を手に取ってくれる皆さんに感謝しつつ、がんばりたいと思います。どうぞよろしくお願いします。

新編集長　佐々木玄太郎

「草間彌生展」では、展覧会とコラボでスイーツが登場しました。上通のカフェ・スイス、当館と同じ施設内のホテル日航熊本、そして館内のカフェ・レガルと、3店でそれぞれコラボスイーツを楽しめました。目で見て楽しんで、食して幸せな気分になって。それぞれのお店で水玉をモチーフにしたり、食器が草間さんの絵柄だったりと工夫をしてくださっていて、期間限定なのがもったいない！とスイーツをほおばっておりました。

担当　濱川倫子

当館活動に関わるアーティストのコーナー「レター・フロム・アーティスト」。あわせてアーティストの最新情報をお届けします。

Letters from Artists

第13回

アーティスト 日比野克彦さん

5月10日、下通商店街でマッチフラッグ制作ワークショップが行われました。マッチフラッグはたくさんの地域で開催していますが、熊本の印象はいかがですか?

日比野：今回のマッチフラッグは布の貼りと染めの2種類で行っていますが、その両方の手法を同時にやるというのは熊本だけです。熊本はマッチフラッグ発祥の地ということで、ブラジルに持って行くものと、商店街に飾るものと、九州国立博物館に飾るものと、一気にやりました。熊本の商店街はとても元気がよくて、マッチフラッグと同じ日にくまモンがやって来たり高校生のパレードがあったりと、他のイベントも開催されていましたね。ワークショップの間、非常に活気があってよかったです。熊本市現代美術館がまちなかにあるという利点が最大限に商店街にも波及していて、美術館内だけでなくまち全体が表現の場になっているなあということを今回あらためて感じました。

マッチフラッグのワークショップは他の地域ではどのように実施していますか?

日比野：今回は12の地域で開催するのですが、意図的にいろんなバリエーションを組んでいます。姫路の家島では小学校を会場にして、その全校生徒で制作しました。福島の喜多方では小さなスペインバルのオーナーが幼稚園児のために小さなサッカー教室を行っているので、そのバルを会場としました。また新潟では市の美術館内でやりました。サッカーがいろんな地域でいろんな展開をしているのを見せたくて、そのようにいろいろな形でやっています。やる場所も作る枚数も参加する人数も飾る場所も、地域によって全然違います。ここ熊本では、やはり商店街と美術館が一体になっているというところを活かしたいと思いました。

サッカーとアートを組み合わせるというのはかなり珍しい試みですよね。

日比野：それは自分としても意図的にあえてぶつけているところがあります。日本においては、いわゆる美術と体育は対極のもののように思われています。運動が好きな人はおとなしく絵を描くのが苦手で、逆に絵を描く人は外でみんなで遊ぶのは苦手だ、というような先入観・イメージがあるじゃないですか?でもぼくは両方とも好きなんです。スポーツは根本的にすごくクリエイティブなものだと思うし、アートはフィジカルで身体をともなうものだと思っているので、そもそも同じものなんだ、というのを伝えたいというのはありますね。

対戦相手国と日本のナショナルフラッグを合わせてマッチフラッグを作ることには、どのような意味がこめられているのでしょうか?

日比野：マッチフラッグの大きなメッセージのひとつは「サッカーは文化だ」ということです。サッカーというと「スポーツ」「勝負」「勝者と敗者」「点数を競うゲーム」というイメージがありますが、もう一方の側面としては非常に文化的なものだ、「文化の交流」だ、ということを見せたいのです。今回はブラジルでW杯があります、そこでは32ヵ国の代表がサポーターも合わせて集まり、一つの場所で試合をします。「試合をする」ともいえますが、そこでは意見交換をしたり、互いの技を見せ合ったり、エールを送ったりということが行われます。違う者同士が集まる場というのは、新たなものが生まれる場です。文明の発祥は、大きな川にいろんな人が集まってきて、多様なもの、それぞれの特徴が交わったことです。それと同じように、今回はブラジルという大きな川のほとりにプレーヤーやサポーターがたくさん集まってくる、そしてサッカーという言語によって文化交流が行われるのです。そのイメージを見える形にするのがマッチフラッグの役割で、そのために一つの旗を一つの旗にして応援をするのです。

マッチフラッグを試合の行われる現地に持って行ったときにはどのような反応が見られますか?

日比野：日本は今回レシフェというまちでコートジボアールと試合をするのですが、現地のまちは試合の1週間前や2週間前から受け入れ態勢になっています。試合が近づくにつれてそれぞれの国のチームやサポーターが入ってくると、やって来た人々と現地の人々とが互いに「よくぞ来たな!」「おれも来たぞ!」といって、まちはどんどん盛り上がっていきます。ホストシティーであるレシフェの人は、はるばるやって来た人々に対して「よくぞアジアから、アフリカからやって来た!」と、本当にあたたかく迎え入れてくれます。すでにそこでサッカーの試合や交流は始まっているんですね。そこに国名と日付、そして「レシフェ」と書かれているマッチフラッグをもっていくと、「われわれのまちの名前が書いてある!!!」といって彼らは大喜びして、一緒になって応援してくれるんです。実際の試合自体は90分で終わってしまいますが、それまでをいかに盛り上げて楽しむかということなんです。現地に行ったサポーターはそれを十分に味わい、サッカーってすごいな、勝ち負けだけではなく文化なんだな、と感じられると思います。ぼくは90年のイタリア大会のときに初めてW杯に行ったんですが、そういうことを感じました。だから「サッカーは文化だ」ということをマッチフラッグを通して広めていきたいなと思っています。

マッチフラッグの今後の展開について教えてください。

日比野：今は日本と対戦する3ヶ国のマッチフラッグを作っていますが、これは日本目線でやっているんですよね。でもアジアには他にも多くの国があります。アジア予選には43ヶ国が出場していて、日本は3次予選から参加しているけれど、その前にもっと多くの国がアジア代表の枠を狙って予選を戦っています。だから、そこでも「ネパールVSカンボジア」のようなマッチフラッグを作ってみたいなと思っています。そうしてマッチフラッグという文化交流を可視化する手法を、アジア各国にW杯の一次予選から展開できるようにしていきたい。そんな夢をもっています。

(聞き手：佐々木、インタビュー：2014年5月10日)